

## 「VFC同好会の活動」

## 宮城県気仙沼向洋高等学校

### 1. 活動の概要

「VFC」は「Volunteer Friendly Circle」の略称であり、本校の部活動のひとつである。部員数は約30名、だが、実際に活動している者は半分程度であった。震災後、避難所その他で活動した部員もいたが、5月9日に漸く授業が始まり、部としての活動も再開された。しかし、津波により壊滅的な被害を受けた本校は、11月になるまで近隣の3高校に分散し、その上、JRも復旧せず、VFCも統一した活動は困難だった。

社会福祉協議会の建物も壊滅したが、そのスタッフを中心に災害ボランティアセンター（VC）が設置され、活動が始まった。VFCはVCと連絡を取りつつ、震災復興に関わる以下の活動を行った。（従来通りの福祉等に関する活動は別途行ってきた。）

#### ①拾得物の洗浄・整理（6月）

ガレキの中から見つかった様々な拾得物が体育館などに集められた。そのひとつ、唐桑体育館で洗浄や整理の活動を行った。写真やアルバム、賞状やトロフィー、ノートや教科書、食器などの器物、それらの泥を雑巾などで丁寧に落とし、発見場所ごとに整理し展示した。かなり根気のいる作業であったが、普段は活動に参加しなかった生徒も何人か来て、熱心に取り組んでいた。会場を訪れていた被災者が自分の結婚写真をその場で見つけ、喜んでくださった。モノを媒介に、多くの市民の人生に触れることができたようだった。

#### ②足湯サービスの手伝い（6月）

山あいの落合保育所も避難所になり、お年寄り達が生活していた。東京の大学生グループが足湯サービスに訪れたが、その手伝いをした。マッサージしながら、お年寄りとおふれあい、被災体験だけでなく若い頃の思い出など、いろいろな話を聞くことができた。

#### ③仮設住宅住民懇談会の補助（7月）

反松公園に仮設住宅が完成し、その最初の住民懇談会が社協主催で行われたが、その手伝いをした。生徒達は戸別に案内を配付し参加を呼びかけ、参加した人達（高齢者が多い）の話し相手になったり、茶菓の接待をしたりした。また、子ども達

の遊び相手にもなり、充実した時を過ごしたようだ。津波ですべてを失った90歳の方が自分の店を復活する決意を語っておられたのが印象的だった。

#### ④街並み模型作りと高校生交流会（8月）

神戸大学のボランティアなどが被災前の気仙沼の市街模型作りをしているが、それに参加した。同時に奈良県の高校生徒会のメンバーと交流することもできた。社協のスタッフの先導で、奈良の高校生と一緒に被災地区の見学も行った。活動の終わり頃には大学生達とも、奈良の高校生達ともすっかり打ち解けて交流が深まった。

#### ⑤社協職員との懇談会（10月）

VCで懇談。仮設入居者が孤立しないような支援の必要性を学んだ。

### 2. 活動の成果等

部員の中には震災で親を失った生徒もいる。そのうちの一人は、「亡くなった父のことを思うと涙が出てくるが、震災を忘れないために、震災と向き合うためにボランティア活動を続けたい。」と述べている。別の生徒も「ボランティアをすることで震災を過去のことにしたくない。」と語っている。

また、被災した方々や、普段接することのない遠くから来たボランティアの大学生や高校生とのふれ合いで、視野が広がったという生徒も多い。さらに、普段は突っ張り気味であったり、無気力そうに見えたりした生徒が、活動の中で生き生きしてきたのも成果のひとつであった。

心の傷は、やはり人との関係によって癒される。被災地の高校生は震災を受け入れ、人とのつながりを通して、成長しようとしている。



唐桑体育館に集められた拾得物